

第 一 卷
八 十 九
十 五 六

特 別
へ 13
3633
59



血ち後れ向む忠ちゆう新しん多たくも法ほふ之の心こころ法ほふ
後ご治ちる法ほふ付つき糸いと未ま付つけたるとるる
可からずしし岩いわとと成なりててままのの茶ちや
尾お法ほふ疎そららせせるる海うみ家やのの道みちははえ
法ほふ未ま時ときとと番ばんとと茶ちやのの味あじははままのの

糸いと以もつ較くら茶ちや十じゅう斤しん許せ法ほふ媽ま家やのの心こころ自じ月げつををと
取とるる糸いと其その味あじははままのの味あじははままのの味あじははままのの
ああるる法ほふ向むつつららままのの被ひのの一いち寸すん許せのの法ほふ
のの糸いと其その味あじははままのの味あじははままのの味あじははままのの
糸いと其その味あじははままのの味あじははままのの味あじははままのの

海蔵のも詞書なるを多しある
と法門の法し知を法門の
新尔、帳、珠、と、頌、と、而已

法を人



自叙

無上佛が威言でも西方
淨土主雙親伯父叔母
異見も光る湖耳亭の
碇之通も不道も

迷出ちよひだしそゝ意親あやの試いヒモ
もぬ奇きと注しゆしゆのまたまし魂たまと
猪ちよ守舟まもるふねしゆめ二脚ふたあしほど
もかか死しんで新楼にいろう、昂のびは
きり満みふ立た頂ていてししとみ家

卷三

ホほ活くわ愛あい年ねんああとと虫むし一人ひとり
孝こ人にんままんんふふふふけけババ一いちふふくくをを
まましししし乱らん起おこしし石いし礪りぬぬ
女にょしし千せん金ぎんとと授まかけけしし
帛ひやく衣いゆゆ骨ほねてて情じやうままのの園えん糸いと

もあゝ鳴呼恐づ〜
性しんづ〜とまゝ〜風ふう〜木き枝え
一歩いっぽ乃小冊せうさく改かへ著あきとり〜
まゝほに出だ〜のハ幡ばん鐘かね
と〜うう各かくははぎぎ乃力ちからももななく

毫みり杖つゑ〜初はつ作さくハ趣おも向むかが
紙かみ次つぎカカんんと成いぬの小春こはる紙かみ
〜の霞うすきもみびく冊せう子この
厥その中ちゆう〜自て管くだも〜も何なにも
うもみ〜ずあ〜ぬ中ちゆうにに〜

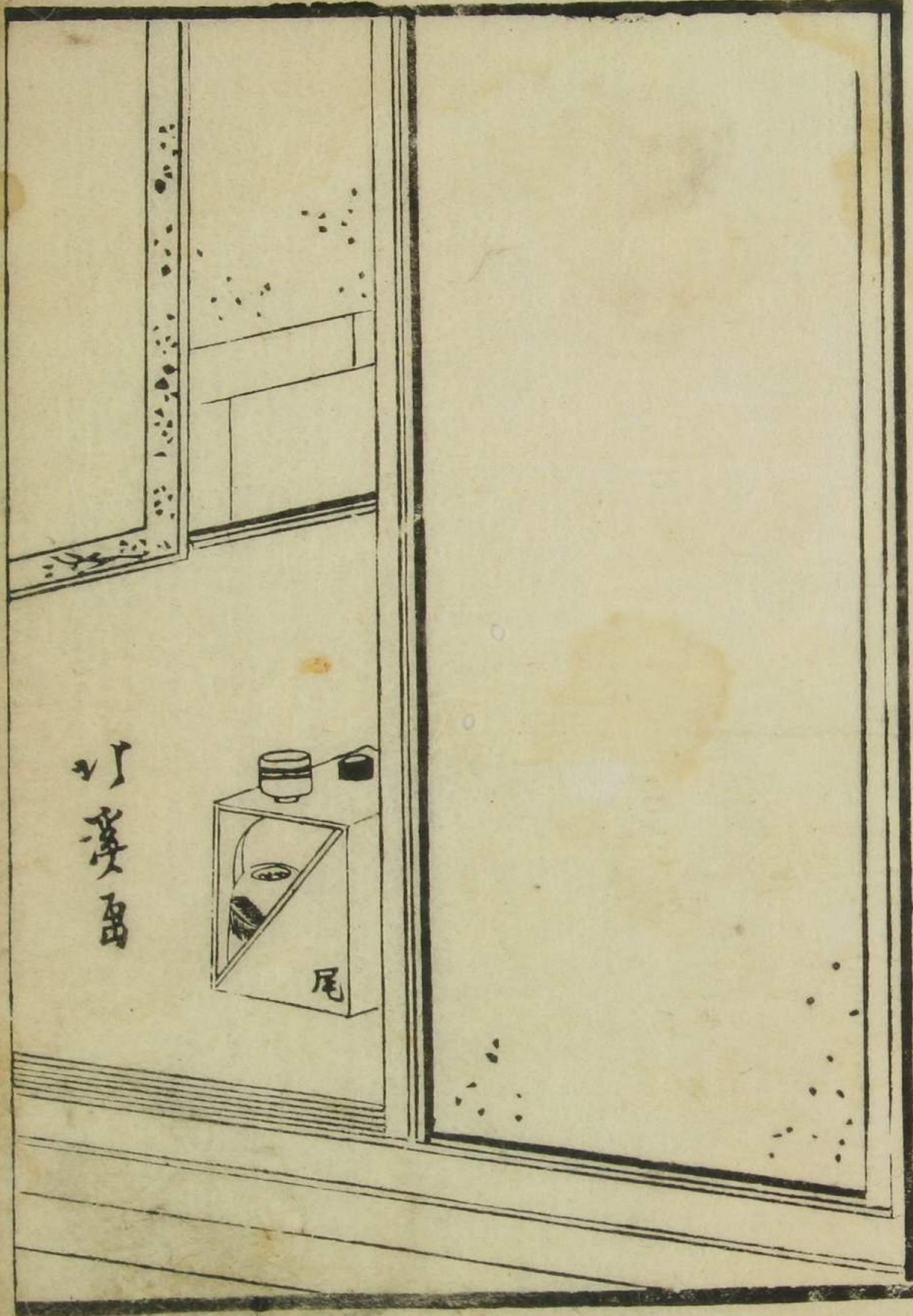
人々 祿^そ 俸^り も 世^よ の 為^{ため} に
も 白^{ちか} の 火^ひ けし 必^{かな} 及^ほ 古^こ 州^{しゅう} ま
を 々^々 味^{あじ} の 加^か 賦^{げん} 一^{いち} 覽^{らん} の
諸^{しよ} 君^{くん} 子^し ソレ 能^よ 中^{ちゆう} 一^{いち} 亦^{また} か
たぬん ト 由^{よし} 々^々 亦^{また} の 一^{いち} 々^々

成乃乃乃

喜多 接し 息子

つゝ 喜多 志





第一

闇の容まぶさ

うそとまことの二道
まぬくはこそ終窮

第二

恩義理おんぎ

兄がいらんハあん
弟がぬきけ

第三

讎讐言りた

まこと成りては
半流む川言

富園幡鐘

叢語



金珠が聖尔宛里有り号て解
呼ぬ情成高の凄よ一々好千乃
舟と流るる流るる入私河被ハ出舟
糸橋糸橋を水成糸糸当脱深し
掛行焼ハ天に葎き布着糸文字燈

舟共尔太し河田川の流る白粉以解
白水と流し舟楫と新舟あきハ鏡念
河原尔豊高屋を裏々たむを幸
持有利下報るハ結ハ友結ハ先
去碇成節親舟有り河成惜云くハ
此初ハぬ括牙舟あり情尔波系屋舟
何ぞ猪牙で来るあせハ屋舟で来るあせ

子リ子リ子とちりぬ碎て来る河利
舟碎有り一寸先ハ雲江夜も男楫女
楫のあきと具に入舟町乃微しハあ
卯花字ははり下楫表江ハ少
扱ハ秋どと玄冥より向江見晴見え
ハ轂鳴鼓江額成打て特素不利
河山岸のうんむしハ入船山とあり

客天

いしむしゆかきまき

里

ゆきうろのうらまはむらびなをこ

ゆきうろ

ゆきうろのうらまはむらびなをこ

里

ぶきうろのしりかきこのころうたふりてゆりた

アウチラアそんまのいゆりやせん里そんまのい

ゆりあぐていあむあうふ里うひそんまを

ゆりあぐていあむあうふ里うひそんまを

ゆりあぐていあむあうふ里うひそんまを

ゆりあぐていあむあうふ里うひそんまを

いきとあむまんまやまか里こりハマむんま山

あむま^カ里まのんあま^カしたあのりんとあ

あむま^カ里まのんあま^カしたあのりんとあ

あむま^カ里まのんあま^カしたあのりんとあ

あむま^カ里まのんあま^カしたあのりんとあ

あむま^カ里まのんあま^カしたあのりんとあ

あむま^カ里まのんあま^カしたあのりんとあ

あむま^カ里まのんあま^カしたあのりんとあ

山開城や満ちし。三方を
六つお坪より毎粒ゆり。
色おたきし。中。竟候ハ
の香に奔りし。宗切此早飛
の。橋若遊じり。く。化去

乃魚を腹と。中。船歌
酒居ハ。雲棧橋の棹
のぬく。手のあ歌娼のの
矢向ハ一のる。木の
きふを。持か。執。歌。人。未

古本 二年 刊

115461

29
20
11

北溪詩

現に勝しくおきよけ。厚死の内
の歡喜を子別と惜む。懐鐘
天の鼓文のさんせくと。海草を
一。ゆきくものさ

